

号外



Design

～地域包括ケア病棟から地域をデザインする～

発行元：地域包括ケア病棟“彩り”・リハビリ科・地域医療連携室

地域包括ケア病棟広報誌Design号外21号です。表面は、地域包括ケア病棟“彩り”からのお知らせと、6月の問い合わせ状況についての報告です。裏面は、相楽東部地域包括ケアワークショップの参加報告です。（地域医療連携室 室長 南出 弦）

デイルームにテレビを設置しました。

～ 入院生活の質向上のために ～

患者さんの入院生活の質向上の一環として、7月より、地域包括ケア病棟“彩り”のデイルームに、テレビを設置しました。日々のテレビ番組の放映の他、患者さんに懐かしんでもらえるような映画を放映するなどして、役立てていきたいと思っています。

（地域包括ケア病棟 看護師長 吉崎 浩美）

6月の問い合わせの状況について（ご報告）

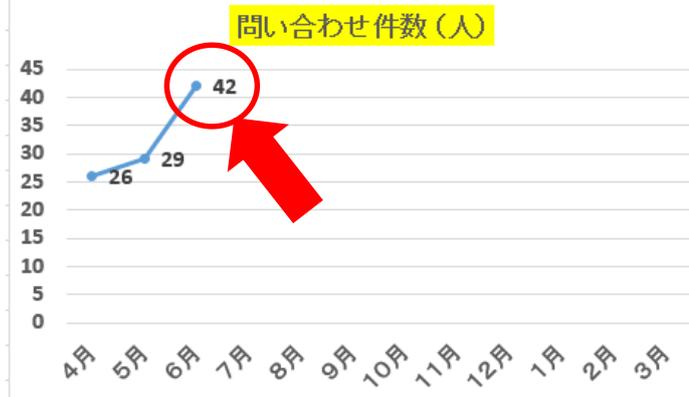
～ 引き続き、よろしくお願いします ～

先月6月の地域の皆様からの問い合わせは、右下の図の通りです。いつもお問い合わせ頂き、ありがとうございます。引き続き、迅速に対応できるよう取り組んで参ります。ご意見、ご要望などがありましたら、お気軽にお問い合わせ下さい。

*

電話：0774-73-1818

（担当：中野・中嶋）



「山城ケア病棟」と検索下さい。

地域包括ケア病棟広報誌“Design”のバックナンバーがご覧頂けます。もちろん、スマホでもご覧頂けますので、お気軽にアクセスして下さい。

山城ケア病棟

検索



地域医療連携室より

～ 相楽東部地域包括ケアワークショップに参加して ～



7月6日（土）、笠置町の「つむぎてらす」で開かれた『相楽東部地域包括ケアワークショップ』に看護部竹内副部長と共に参加しました。このワークショップは、少子高齢化が進む相楽東部地域（笠置町、和東町、南山城村）における地域包括ケアシステムの充実を図ることを目的として開催されたもので、行政担当者や専門職の他、老人クラブの代表者など計70名程度の参加がありました。



1部は、京都府北部の伊根町からの実践報告「住民参加による地域包括ケアシステムの仕組みづくり」と題して、石野秀岳所長（伊根町国民健康保険伊根診療所）と川口秀子副室長（京都府丹後保健所 保健室 地域包括支援担当）による講演がありました。印象的だったのが、地域のあり方について、行政や医療機関が住民に押し付けるのではなく、住民参加のグループワークなどを通じて、住民自身が“決める”というプロセスを重視したことです。



2部は、「相楽東部地域における地域包括ケアの充実に向けて ～皆で考えよう！持続可能なまちづくり、未来づくり～」というテーマで、前半は、柳澤

衛先生（柳沢活道ヶ丘診療所）による、在宅療養あんしんネットワーク「きづがわねっと」の取り組みの紹介がありました。きづがわねっと設立の経緯や東部地域で開催している看取りや認知症をテーマとしたカフェについて触れられていました。東日本大震災を契機として、顔の見える関係作りの構築を目指して設立された「きづがわねっと」が、改めてこの地域で根付いていることを実感しました。2部の後半は、「皆で考えよう：相楽東部での住民参加型地域包括ケアによる地域づくり」と題したグループワークがありました。それぞれのグループには、地域住民の代表として各町村から老人クラブの方や民生児童委員の方がおられ、まさに住民参加型のグループワークとなりました。私は、僭越ながらDグループのファシリテーターを務めさせて頂きましたが、介護の担い手である専門職の不足により、将来介護が必要となった場合にどうしたらいいのか不安であるが、だからこそ日頃から隣人同士の支え合いが強固であるという声があり、大変印象的でした。また、日頃の業務の中で利用者（住民）の声を聴くことが多い専門職として、聴いた内容をどのように行政の担当者に届けたらいいのかという話も出ました。私は現在、木津川市加茂町に住んでいますが、グループワークを通じて、専門職としての“私”だけではなく、地域住民としての“私”がしなければならないことを改めて考えさせられました。

今回のワークショップは、行政担当者や地域の専門職だけでなく、老人クラブや民生児童委員の方々などが参加し、生の声を聴くことができたという点で大変有意義でした。そして、行政、専門職、住民それぞれが垣根を越え、一つのテーブルで議論することが地域づくりを推し進める近道であることを実感しました。学んだことを今後の業務に活かしたいと思っています。

（地域医療連携室 室長 南出 弦）

地域包括ケア病棟“彩り”ご入院のお問い合わせ先

0774-73-1818（担当：中野・中嶋）